

## 近頃見た映画、「レ・ミゼラブル」と“Christmas in the Trenches”

映画が終わっても、席を立つ人がほとんどいなかった。なぜ、このようなくらい映画が今どきの若者に人気なのか、満席であった。一番前の席で、ふんぞり返るようにして見た。「レ・ミゼラブル（嗚呼、無情）」をまれにみる純愛物語と思い、その不思議さに魅かれたのだろうか。飢えた妹の子どものためにパンを盗んで、19年も牢に入った。ジベール警部の正義、裏返ったジャンバルジャンへの執着「愛」。不幸な人々が人生に翻弄されて、一人で生きることにはできないゆえに、稔らない「愛」にすがり、あの世の入り口で、やっと神の祝福を受ける。理想に生き、裏切られ、他方で、守銭に過ごし、陥穽に落ちる。ヴィクトル・ユーゴは、人生とはひたすら重荷を背負って坂を上ることだと言いたいのか、その者のみが神の祝福を受けると言いたいのか。

確かに、神仏、カミあるいは全自然、何か絶対的な物事・事象への信仰がなければ、人生における行動規範がないということだ。モーゼの十戒にも、仏教の五戒にも共通して、「殺すな、盗むな、嘘をつくな」などがある。人類が社会を構成するためには歴史的に当然の戒律として、求められた。しかし、「塹壕の中のクリスマス」では、神の名における戦争として、人を殺すことを教団は要求し、他方、戦争の敵とはいえ人殺しを望まない、あるいは人殺しができない神父は教団から出されて、自らロザリオを外すことになった。リバプールから来た兵士は歌った、「撃てと命令する者たちは死にもせず負傷もしない。そして銃の両側にいる僕らは同じ人間なのだ」。宗教教団と信仰は異なるのだと理解できた。

日々の暮らしの中で、十戒はいつこうに守られていない。ジャンバルジャンのように飢えに苦しむ子供のために、やむを得なくパンを盗むのさえも、ジベール警部は許さなかった。心ひろい神父はジャンバルジャンを受け入れ、ジャンバルジャンは人生への憎しみを克服していった。飢えのためでなく盗むのは、戒律や法律を持ち出すまでもなく、誇りのない、罪深い行為である。最近、江戸野菜講座の皆様が収穫を心待ちにしていたブロッコリーが畑から一挙に60個も盗まれた。一人自分が飢えて食べるための数ではない。小金井市民交流センターで、環境フォーラムがあり、エントランスホールにホームガーデンの展示をした。ボードの下に、アンケート用紙を置いて、市民農園に関して広く市民の意見を頂けるようお願いした。ところが、返信用に80円切手を貼って70枚ほど置いたらすぐに盗難にあった。アンケートは1通のみ返信されてきたのみであった。

何度、盗難にあっても、大学の植物園（彩色園）を閉ざさずにきた。これからも、市民の自由な散策を受け入れるために、門戸を閉ざさないでいたい。大学も市民から尊敬を受けなくなった。残念ながら、盗難は増えるばかり、ごみは投げ入れられるばかりである。しかし、どんなに悔しくても、学びの自由を閉じてはいけないのだと思う。

2013.2.24 記



ヴィクトル・ユーゴが暮らしていた家の1階は、チョコレート屋とレース屋になっている。柱のプレートに記録されている。ベルギーのグランプラスにて。